

お米が教えてくれる平和

呉市立広小学校 四年 相原 潤

八月の始め、ぼくは平和公園に行きました。ぼくは五月にアメリカのオバマ大統領が広島に来た。というニュースを観た。お父さんがその記事を新聞で読んでいた時、

潤ちゃんは、平和公園に行きました。お父さんやお母さんが潤ちゃんぐらいのころは、平和公園に学校からもよく行きました。家族ともよく行きましたよ。一度一緒に行つて

みようか。

と言った。ぼくはテレビで観たり、車で近くを通ることはあったが、じっくり行つたことが無かった。たのしみだった。

まず、原爆ドームを見た。元の写真からは想像がつかないくらいホロホロな姿だった。戦争はこわいな。ぼくの家だ。たら形も残らなかつたかもしれない。と思った。次に、平和記念資料館に行つた。そこには、たくさんの原爆の写真や、苦しむ人々、焼けた物、

が展示されていた。お父さんに説明してもらいながら一つ一つ見て回った。ぼくはと中で真っ黒なつぶがたくさん入っただお釜を見つけた。お父さんに聞き、これはお米だったと分かった。ぼくは、真っ黒な炭になっていることにおどろいた。その時、お父さんが、「このころは、お米は簡単には手に入らなかつたはずよね。」とつぶやいた。ぼくは、お釜に入っているお米を見て、三年生で、昔はお米はお釜で炊き炊けるとおひつに移す。と習ったことを思い出した。このお米はまたおひつにも移されていない。まだたれも食べてない状態と想像した。八月六日、時間は八時十五分、お釜にあるたくさんのお米。ぼくは、お母さんに、「原爆の落ちた日は、この家族が集まる日だったんかね。たれかのおたん生日だったんかね。」と話すと、お母さんも同じことを思っていたと言った。

ぼくは、毎日お母さんがお米をとぎ、毎日炊飯器にたくさんのご飯が炊きあがるのを、まるで当たり前の景色のように思っていた。でも、これは当たり前ではなく、平和な毎日のおかげだと強く感じた。そして、炭になっただたくさんのお米を見て、ぼくは自分のたん生日を思い返した。ぼくのたん生日には毎年おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にお祝いしてくれる。その時には、お料理上手のおばあちゃんがいつもお米を使ったごちそうでお祝いをしてくれる。色とりどりのちらしずし、ふっくらしてきれいなうす紅色のお赤飯、ぼくの大好物のおはぎ。すごくうれしくて、いつもより特別においしい。家族もみんな笑っていて、たくさん話もする。

ぼくはこの夏、戦争について考えることを通じて、毎日の「いたたまず」や「ごちそうさま」が一番の平和だと知ることができた。そして、毎日お米を囲む家族の笑顔をもっと大切にしていきたいと思った。